

【活動レポート】1/27 学生がワークショップをしました(府中市日本語適応指導教室)

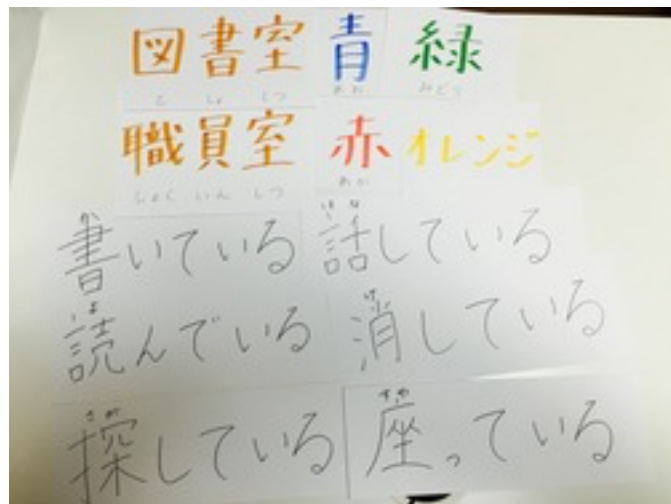
府中市では、教育委員会主催による小中学生を対象とした、日本語適応指導教室が開催されています。週1回半年間の教室に、本学学生が子どものサポーターとして関わっています。今年度後期は、4年生と1年生の学生が、中学生の日本語学習のサポートに通っていました。1月に開催されたワークショップの、学生によるレポートをごらんください。

私が日本語学習支援をやってみようと思った理由は、海外で日本語教師をするという将来の夢があるので、そのために必ず役立つ経験になると思ったからです。実際にやってみると、日本語を学習する生徒にとっての日本語の難しい点や、私たちが自然に使う日本語でも意味を説明できない言葉に気付くことができました。また、覚え方を教えてあげると意外と簡単に覚えてもらえることもわかりました。

最も苦労したところは、言語学習それ自体というよりも、学習に対する生徒たちのモチベーションに関してでした。「やりたくないのにやらされている」という意識を持ってしまう生徒に対し、少しでもやる気を出してもらうにはどのように接すればいいかわからず戸惑ってしまったときもありました。

そんなときに、ちょうど日本語学習支援のボランティアをしている人どうしが集まって悩みを相談し合う座談会に参加し、その生徒の性格に合わせたアドバイスをいただくことができ安心しました。

また、一緒にボランティアに行っていた先輩やボランティア活動スペースの職員にアクティビティをやることを提案していただき、やることになりました。内容は、数人の生徒や先生がいる絵を何枚か用意し、「私の友達の服の色は?です」「私の友達は?ています(話しています、等)」という文章を作って、それをヒントにどの人なのかを当てるというゲームにしました。



生徒2人が問題を出し合うという形でやる予定だったのですが、当日は1人しか来ることができなかったので、あっさり終わってしまいました。でも、終わった後に「うんうん楽しい」と言ってくれたので、やった甲斐があったなと思ってよかったです。

学習支援をやっていて一番うれしかったことは、生徒がその日教えたことを実際に使ってくれたことでした。「一緒に遊ばない?」「一緒に遊ぼう」というような、誘い方を勉強した日がありました。

その日は、その生徒が帰るときに「一緒に帰らない?一緒に帰ろう!」と言って、帰る時間になってもなかなか帰らず粘っていました。実際に一緒に帰ることはしませんでした、「ごめんね、一緒に帰れません」と言いながらもこちらも笑顔になってしまいました。

私はこの活動をやって本当によかったと思っています。できる限りこれからも続けていきたいです。

(スペイン語専攻1年 遠藤七海)

日時: 2016年02月17日

